

## アウグスティヌスの初期著作における真理と知：い わゆる魂の不死の論証との関連をめぐって

又野，聡子

<https://doi.org/10.15017/1398585>

---

出版情報：哲学論文集. 28, pp.77-94, 1992-09-20. 九州大学哲学会  
バージョン：  
権利関係：

## アウグスティヌスの初期著作における真理と知

——いわゆる魂の不死の論証との連関をめぐって——

又野 聡 子

### はじめに

アウグスティヌスにおいて真理の探究は、その思索の重要なテーマのひとつであった。回心後の彼の最初の著作である『アカデミア派駁論』に続いて真理についての探究が中心となるのは、その翌年（三三六年）に完成した『ソリロクイア』においてである。全二巻よりなるこの書では、周知のように「私は神と魂を知りたい」という希みのもとに、この神と魂が知られるためには真理そのものによらなければならないという文脈において、真理あるいは虚偽に関する考察がなされているのであるが、第二巻ではこれに続いて人間の魂の不死についての論証が、その主要な主題となってくる。この真理の問題と魂の不死の論証とは、どのような関係にあるのだろうか。そしてその連関からいかなることが示されるのであろうか。

小論ではこの問いを念頭に置きつつ、『ソリロクイア』と、その補遺として書かれた『魂の不死について』、さらに『ソリ

ロクイア』の認識論を展開させたものとして『教師論』という、アウグスティヌスの著作活動の最も初期の数年間に著された三つの書物について考察したい。さらにまた、その各々において取り扱われている問題をよりはっきり照らすものとして、晩年の『再考録』の中のそれぞれの著作についての記述も併せて検討するものである。

—

『ソリロクイア（独白）』は、「アウグスティヌス」と、彼に問いかける彼自身としての「ラチオ・ratio（理性）」との対話という形式をとっている。このラチオの「きみは真理を把握したいとは思わないか<sup>(2)</sup>」という言葉に続いて、真理 *veritas* と真なるもの *verum* とについて、

- ・ この二つの言葉によって示されているもの *res* は、異なった何ものであるということ
- ・ 「真なるもの」は「真理」によって成立するのだから、「真理」は「真なるもの」よりもすぐれた（先立つ *praesens*）ものであること
- ・ 何か「真なるもの」は滅びるが、「真理」は決して滅びないこと

の三点が確認されている。真理とは、何であれ「真である *verum est*」と言われるものが、それによって真であるところのものなのである。

さらに、「真なるもの」とは何かということに関して、アウグスティヌスはまず、「それは見えるとおりに在るものである」と定義する。たとえばこの「壁」がほんとうの壁であるのは、それを見ている私がその外見によって欺かれていないからだ<sup>(3)</sup>というのである。しかしこの定義はただちに、「見られているとおりに在るものが真なるものである」とすると、見る人がいなくなつた場合には、いかなる真のものも存在しないことになってしまう」という反論を受けることになる。そこで最後にア

ウグスティヌスは、

「それでは、このように言い直して次のように定義します。私の定義があまりにも短すぎるために否定されても構いませぬ。すなわち、真なるものは存在するところのものである、と私には思われます。」<sup>(4)</sup>

と定義する。すなわち、何ものかとして存在するものは、かならず真なる何ものかとして存在するのである。このことから、真理の問題は「すべての存在するもの」という意味での存在にかかわるということがわかる。

しかし、ここで出された「真なるもの」についての二通りの定義は、アウグスティヌス自身によってどちらが正しいと結論づけられているわけではない。このため、ここでアウグスティヌスは真なるものの定義にさじを投じているのだという見方もあるが、かならずしもそうではなく、むしろ「真なるもの」について「存在」という側面と、それを「見る者」という側面とに或る緊張の存するところから、あらたな問題が展開されるように思われる。すなわち真理の問題は少なくともわれわれにとつては、まず認識との関係において捉えられると言いうことができるが、ここに、われわれの認識の側の問題として、虚偽・偽りのものとの問題が介入してくることになるのではないだろうか。

偽りのもの *fatsum* について、まずアウグスティヌスは真なるものの最初の定義を裏返して「それは見えるとおりに存在しないものである」とする。<sup>(5)</sup>これは具体的には、偽りのものは真なるものと何か類似した点を持っているということである。すなわち、偽りのものは必ず「偽りの何ものか」として表現されるのであって、それらは何らかの点で真なるその「何ものか」に似ているからなのである。しかし、同じ印章によって押された二つの捺印のように、お互いに区別できないほどに似ているものの場合に関しては、様々な差異、つまり非類似性 *dissimilitudo* によって、むしろ偽りのものと言われるのではないかとも考えられる。つまりわれわれが虚偽のものと呼んでいるものは、真なるものに対して似ている点も似ていない点も持っていて、どちらの観点から偽りであると言えよいかはつきりしないのである。ここでラチオは、「偽りのものとは、存在しないのに存在しているかのように装っているもの、あるいは存在しようとしながらも実際には存在していないもの

のである」と言う。<sup>(6)</sup>すなわち、鏡に映る像は映っている当の本人であろうとしながら実際にはそうでないのであるし、肖像画もそれが似せて描かれたところの本人になろうとすることに於いて存在しているというのである。

ところでこれらのものは、すべて「真に偽りの何ものか」である。つまり「偽りのもの」あるいは「偽りの存在」というとき、そこには既に「真なる何ものか」ということがあらわれているのである。偽りのものであっても、それは偽りの何ものかであるかぎりにおいて「真に偽りの何ものか」として存在しているものであり、そこには偽りのものを偽りのものとして成立せしめている虚偽 *falsitas* そのものは決してあらわれてはこない。すなわち「真なるものとは存在するものである *verum est id quod est*」という、先に出された真なるものについての定義は、その裏返しである「偽りのものとは存在しないものである」という表現と対をなすことなく成立するのである。「存在するところのもの」とは、その内に「偽りのものとして存在するもの」をも既にして含んでいるからである。「まったくどこにも存在しないものは虚偽なるものとさえも言われえない」と述べられているように、偽りのものは実際には存在しないと言われはするものの、完全な無 *nihil* ではないのである。<sup>(7)</sup>

しかしここで考えるに、何か或るもの *aliquid* とは、それを捉える観点によつては真なるものとも偽りのものとも判断されるのではないか。つまり、たとえば鉛は「にせの銀」であり「真の鉛」でもあるというように、本来それ自体では真とも偽とも言えない、あるいはむしろどちらでもあると言えるのではないだろうか。そして鉛のことを「にせの銀である」とするのは、実は真なる判断であつて、ここで鉛のことを「これは銀である」とするのが誤つた判断なのである。<sup>(8)</sup>すなわち「虚偽とは事物のうちにはなく、感覚のうちには存在するのである」。<sup>(9)</sup>

感覚 *sensus* は欺かれやすく誤謬の源泉であるといった表現は、他の箇所でも見ることができる。ただし、アウグスティヌスにおいて感覚および感覚器官そのものが直接に否定されているのではない。すなわち感覚器官の伝えるものはただちに偽り、あるいは誤りというわけではなく、感覚そのものはむしろ無謬だと言つてもよいのである。<sup>(10)</sup>水の中に入れたまっすぐな權は、確かに折れ曲がつて見えるが、眼はどこまでも見えるままを伝えているのだから、決して誤つてはいない。水中に入

れた権の屈曲は「偽りの屈曲」と言われはするが、もしこれがまっすぐに見えたならば、むしろそのとき眼は虚偽を伝えたと言われるべきなのである。水中に入れた権が曲がって見えるとき、これを権が折れていると「判断し」、修理しなければならぬと「思う」ならば、そのときその人の「判断」や「思い」が誤ったと言われよう。ここで自分に見えるものを、そのまま真であると思ふ者が誤っているのである。すなわち「偽りのものを見る人が誤っているのではなく、偽りのものと同意する *assentiri* 人が誤っているのである」<sup>11)</sup>。さらにまた逆に言えば、本来「存在する *esse*」とは「真なるものである *verum esse*」(あるいはむしろ「真である」と捉えられるべきなのであって、ここに何かをひとつの或るものとして把握し、名付ける、われわれの存在把握の仕方そのものが問われてくるのではないだろうか。

この問いを問のまま保留しつつ、次にアウグスティヌスにおける魂の不死に関する論証について検討したい。

## 二

『ソリロクイア』では、真なるものが滅びても真理 *veritas* そのものは決して滅びない、ということが論証される過程において、次のような推論がなされている。

「真理は可死的な事物 *res mortales* の内に存在しないことは確かである。すなわち存在するものは何であれ、それがその内に存在するそのものが存続しないかぎり、いかなるものの内においても存続する *manere* ことはできない。……しかるに真理は真なるものが滅びてもなお存続している。それゆえ真理は可死的な事物の内には存在しない。ところが真理は存在し、どこにも存在しないということはない。それゆえ、不死的な事物 *res immortales* が存在するのである」<sup>12)</sup>。

そして真理が魂において在るということによって、アウグスティヌスはその不死的なものが魂 *anima* であることを証明しようとする。すなわちこの真理を学知 *disciplina* に求め、学知が魂の内在することから、魂は常に存続するということを論

証しようとするわけである。

「すべて基体 *subjectum* において在るものは、それがもし常に *semper* 存続するならば、基体も常に存続するのでなければならぬ。さらに、すべての学知は、魂を基体として魂において在る。したがって、もし学知が常に存続しているならば、魂も常に存続しているのでなければならぬ。しかるに学知は真理であり *disciplina est veritas*、この巻第二卷)の始めで理性が説明したように真理は常に存続している。それゆえ魂は常に存続しており、死んだ魂と言われることはない。<sup>(14)</sup>」

特に初期のアウグスティヌスにとつて、真なる事柄とはまずもって学知あるいは学問によって確かめられるものであった。ここでも、「真理なる学知」ということで具体的には弁証学や数学(幾何学)の真理が考えられている。<sup>(15)</sup>

さて、真理である学知が魂において在ることから、魂が常に在るといふことが言われるとき、そこでの魂とは一体いかなるものとして捉えられているのであろうか。

「学知が魂において在る」と言うとき、アウグスティヌスは人間の魂(生きた魂 *vivens anima* と表現される)以外のものを考えてはいないように思われる。そうすると「学知のない人」、すなわちまだ学びの足りない人の魂についてはどうなるのかという疑問が出てくることになる。このことは後に「再考録」でも取り上げられるが、アウグスティヌスがここで人間の魂についてのみ考察していることそのものが、或る問題を提起しているのではないかと予想される。これに関して『ソリロクシア』の時点での論述と、晩年の『再考録』における論述について比較してみたい。

「学知を学んでいない人」について、『ソリロクシア』においては、はっきりとした答えが与えられているとは言えないが、忘却の内にある人に記憶を取り戻させる場合にあげられた後に、「自由学科によってよく学んだ人々については次の如くである。すなわち彼ら自身の胸の内の間違ひなく学知が忘却に埋もれているならば、彼らはそれらのものを学ぶことによつて掘り返し、何らかの仕方で掘り出せばよいのである」と述べられている。<sup>(16)</sup>すなわちこれによると、魂は何らか「既に知っ

ている」という意味で学知を有しており、そういった知において不死であるということになる。

ところがアウグスティヌスは、この箇所について『再考録』においてこの表現を修正して、次のように述べている。

「そういった学問について無知な人々でさえも、うまく質問された場合にはその学問について真なることを答えることがある、ということが信じられるとするならば、それは永遠なる理念の光が、彼らがそれを把握できるかぎりにおいて彼らに現前しているからである。彼らはそこでこれらの不変の真なるものを見ているのであって、それはプラトンや彼の仲間たちがそう考えたように、それら（真なるもの）をあるとき知っていて、それが忘れられたから、ということではないのだ。」<sup>(17)</sup>

学知を持たない人の魂の不死について、「既に知っているものを思い出す」という説明に代えて、アウグスティヌスは「永遠なる理念の光 *lumen rationis aeternae* の現前」ということで説明しようとしているのである。<sup>(18)</sup> この『再考録』の説明によると、その光が現前していない状態（まだ知らないということ）と、光が現前して現に知っている状態との区別が強調されることになる。それによって、「いかなるものもそれが見られるのは生きた魂によってのみである」と言われる魂は、すべてを既に知っていて、それを状況によって思い出すことができるという意味での知においてではなく、「永遠の光が現前することによって、すべてを知ることが可能になる」という意味での知において在ることによって、不死であるということになる。そうすると、「永遠なる理念の光」とは、そういった知が現実化されるための、いわば根拠であるということが出来る。そして魂がすべてを現に知っているのではない以上、知らない状態から知っている状態を成立させる根拠としての「すべてを現に知っている者」があるのではないかということが、予想されることにもなるのである。

『ソリロクシア』では第二巻のほとんどがこの魂の不死の論証のために割かれているが、しかしそれは完結しているとは言いがたい。この点はアウグスティヌス自身も認めていて、『再考録』には「第二巻では魂の不死性に関しての問題が長い」と論じられているが、解決にはもたらされていない<sup>(20)</sup>とある。また本文中でも、まだ学びの足りない人の魂について「もし



きみがこの問題を詳細に取り扱いたいのならば、もう一冊の書物を必要とするだろう」と述べられている。

このもう一冊の書物とは、そのすぐ後に書かれた『魂の不死について』であると考えられる。この書における論証もまた、基本的には『ソリロクイア』と同じく、学知と魂・精神との何らかの必然的な関係を出発点として、魂が不死であることを導き出そうとするものである。しかし、この著作もまた論証に成功しているというわけにはいかない。もとより『再考録』によると、この著作は未完成のままであった。『ソリロクイア』を完成させるための、自分自身の「覚え書き」のつもりであったのに、アウグスティヌスの意図に反して人々の手に渡ったもののようなのである。さらに彼は『再考録』で、「まずこれは、その推論の歪みと浅さのために、私がこれを読むとき、その意欲さえ憔悴させてしまつて、私自身によつてもほとんど理解できないほどに不明瞭である」と前置きしている。したがつてこの著作についてその内容を詳細に検討することは、あまり実りのないことのようにも思われる。

ただし、『再考録』のこの書についての記述は、『ソリロクイア』で残された疑問にも答えるものとして、注目すべきではないだろうか。すなわちそこでは次のように述べられている。

「私は、この書の或る議論において、人間の魂以外の何ものも考えないで、『いかなるものをも学ぶことのない者の中には、学知は存在することができない』と言つた。また同様に別の箇所で、私は『知識 scientia は、何らかの学問に属しているもの以外は、いかなるものをも把握することはない』と言つた。しかし、神は学問を学ぶことはないが、しかもすべての知識を有しており、その知の中には未来の予知 praescientia さえもある、ということとは私の心には浮かばなかつたのである。」<sup>(23)</sup>

小論前章で、真なるものに関して「真なるものとは見られるとおりに在るものである」という定義と、「真なるものとは存在するところのものである」という定義とが、或る緊張を孕んでいることが確認されたが、見る、すなわち知る者とは『ソリロクイア』においてはまずもつて人間の魂であつた。したがつて、われわれが知ることのできないものは真なるものでは

なくなる、つまり存在しなくなるという理由で、最初の定義は一応は排除されたのである。しかしここで、『再考録』で言われているような「すべての知を有している者(神)」について考えてみると、そのような者によって「見られている」とおり在るもの、すなわち存在するところのものこそが真なるものであるということになり、二つの定義は矛盾することなく重なるようになってこよう。

このことは、先に「永遠なる理念の光」について考察した際に出された「すべてを現に知っている者があるのではないか」という予想とも一致してくるのである。

しかしながら、やはり魂の不死の論証は、甚だ不完全なままに終わっていると云わざるをえない。これは、既に見たように論証の道筋においては、学知をただちに真理そのものと見做していること、魂を人間の魂としてのみ捉えていることなどによるものであるが、同時に、こういった議論の立て方そのものにこそ問題があると言いうことができよう。すなわち魂は、そこにおいてその都度様々な事柄が知られてくる場所であり、その意味で少なくとも可変的 *commutabilis* であるということとは否定できない。むしろ魂・精神は、何かを認識する(さらに、認識している自らをも認識する)ことにおいて在るとも言えるのではないか。そこでは、何ものか *aliquid* を或るひとつの何か *quid* として捉える、その捉え方そのものが、魂の在り方に直接かかわってくるのである。魂はこのようなその都度の認識において、真理、あるいは不死性に何らかとかりゆくことができる、ということと言えるとしても、魂自身は決して初めから、あるいは未来の或る時点で「不死である」とは言えないのではないだろうか。すなわち、魂の不死とは決して或る静止した状態として成立するものではないのであって、そうである以上、それを結論として最初に立てて論証してゆくという議論の構造自身が、いわば徹底して挫折せざるをえなかったのである。

この議論の挫折そのものはしかし、魂の不死ということもまた、われわれが「存在する」ということをどのように捉えるかという問題へと収斂すべきであることを、逆に照射してくることもなろう。ここに、『ソリロクイア』における真理の探

究と、魂の不死の論証とのかかわりの中心があると思われるのである。

### 三

『ソリロクイア』において矛盾するように見えた真なるものについての二通りの定義は、「すべての知を有する者」を考へることによって同時に（というよりもむしろ同一のこととして）成立する地平が開かれた。

しかしながら、やはりそれはわれわれにとっては異なった事柄としてしかあらわれてはこない。われわれはすべてを知っているのではないからである。われわれは具体的な個々の把握において、何ものかが真なる何ものかとして存在していることを捉え、さらにはそのように把握している自らをも反省的に捉えるのではあるが、そこでそういった把握を成立させているものとしての真理自身が直接に捉えられることは決してないと言わざるをえないのである。

このことは、われわれにとつての知は果たして伝える（あるいは共有する）ことが可能であるのか、という問いを絶えず含んでいるのではないだろうか。アウグスティヌスが『ソリロクイア』、『魂の不死について』に次いで、その二年後に「教える」ということを主題とした『教師論』を著したのは、その意味においてもごく当然のことであるように思われる。

『教師論』は、アウグスティヌスと息子アデオダトゥスとの対話の記録である。その探究は、語る *loqui* とは一体いかなることなのか、という問いに始まる。われわれが語るのとは、どのような場合においてであれ、教える *docere* ためか、あるいは想起 *commemorare* させるためであると、取り敢えずは言うことができる。そこで用いられることばは、しるし（記号）*signum* の一種にはかならない。しるしとは、或るものを表示する *significare* 機能をもったものであるが、その意味でことば *verbum* は記号の一種なのである。さらに表示されたものの認識 *cognitio rei* は、少なくとも記号の認識よりはすぐれている *potior* とされる。そしてアウグスティヌスは、まずしるしによるのでなければいかなる事柄も教えられ得ないとする。<sup>(25)</sup>

しかし、ここで「ことばの機能は教えることである」とすると、次のような問題が出てくるのではないか。すなわち

「もしこれらについて、より注意深く考察するならば、おそらくお前（アデオダトゥス）は、その記号によって学ばれるものは何ひとつないということを見出すであろう。というのは、記号が私に与えられるとき、もしそれがどの事物の記号であるのかを私が知らないとすれば、その記号は私に何も教えることはできないし、反対に私が知っているとするならば、私は記号によって一体何を学ぶというのだ。」<sup>26</sup>

もし、記号が記号の役割を果たしているところの当のものについて、その記号を与えられた人が何の知識も持っていないとすると、記号は何ごとをも教えてくれることはない。けれども、もしもその当のものを既に知っているならば、記号はこの場合も何ら新しい知識を教えたことにはならないのである。つまり「与えられた記号によって事物が学ばれたというよりは、むしろ認識された事物によって記号が学ばれるのである」<sup>27</sup>。

すなわち、ことばの意味について知らないときには、ことばは何の新しい知識も伝えてはくれず、反対にその意味するところを知っていたときには、ただちににそのことばの意味するところを知ることになる。いずれの場合にも、ことばによっては何も教えられないという結論になるのである。

「事物を認識することによって、はじめてことばの認識が完成されることになる。ことばを聞いたからといってことばが学ばれたということにはならない。というのは、われわれは既に知っていることばを学ぶということはないのであるし、知らなかったことばを学んだと言われるのは、発音された音の響きをわれわれが聞くことによってではなく、表示された事物の認識によって生ずる、そのことばが表示するところのものを理解するのだからではないのである」<sup>28</sup>。

ことばによっては何も教えられることはできない。それではわれわれは、いかにして学ぶと言われるのであろうか。

「ところでわれわれが理解するすべてについては、外部で声を響かせる者ではなく、内部で精神 *mens* そのものを支配する真理に対して、われわれはたずねる *considere* のである。おそらくそれはことばによってたずねるよう勧められる

admonere のではあるが。そしてたずねられた者は教えてくれるのだが、その方は内なる人 homo interior の内面に住み給うと言われるキリスト、すなわち変わることをなき神の力であり、永遠の知恵であり給う方なのであって、すべての理性的な魂がたずねるのはこの方に向かつてである。しかしこの方は、人が持っている各々の悪しきあるいは善き意志によってそれぞれが受け容れることのできるかぎりに応じて、明らかにされるのである。<sup>(29)</sup>

かくして、『教師論』では「われわれは、地上においてははいかなる人をも教師と呼んではならない。なぜなら、すべてのものの教師はただひとり、天上にいらつしやる方のみなのであるから」と結論されることになる。<sup>(30)</sup>そこでは人間のことばは、何ごとかを伝えるということに関して何ら主導的な力を持つてはいない。このことは、われわれにとつて知の伝達は可能であるか、という問いに否定的な答えを与えるもののようにみえる。<sup>(31)</sup>

しかしわれわれは、内なる教師にたずねることによって、つまり自らの認識を、ただ一人の方、一なる真理へと差し出すことによって、或る同一の可能性のもとに共に立っていると言えるのではないだろうか。このことのみが、われわれにとつての伝達(むしろ共有、あるいは communicatio)を保証しているように思われるのである。<sup>(32)</sup>こういった問題は、一方ではしるしの解釈の問題として聖書解釈の著作において、また一方では人、あるいは人のことばの被造性の問題として『三位一体論』等において展開されることになる。

少なくとも『ソリロクイア』から『教師論』への思索の過程をたどることによって次第に明確になってくることは、われわれはあくまでも自らの内において真理に問いたずねることにおいて何ごとかを知ることである。ここにわれわれは「知る」という一見能動的な在り方から、「たずねる」という或る受動的な在り方への転換を見ることができ。われわれは何かを判断するというよりは、むしろ問いたずねた真理によって判断されるのである。<sup>(33)</sup>

よく知られた箇所ではあるが、『告白』に、以下のように言われている。

「彼らは欺かれたくはないが、欺くことは欲するから、真理が真理自身をあらわすときにはこれを愛するが、真理が彼

ら自身を暴露するときには、これを憎むのである。そこで真理は彼らに対し、こういう仕方では報いるであろう。すなわち、真理によって暴露されるのをいやがっている彼らを、その意に反して暴露するとともに、真理自身はそのすがたを彼らの前にあらわさない、という仕方<sup>(34)</sup>で。」

つまりわれわれの認識は、真理によって自らの在り方が露わにされるといふ仕方、或る受動的な構造の内に在るかぎりにおいて、われわれは真理を捉えるというよりは真理に捉えられる、とも言えよう。その意味でわれわれの認識は、どこまでも受動的であると言わざるをえないのである。

「しかし、精神 mens によって、すなわち知性 intellectus と理性 ratio によってわれわれが眺めるものについて論じられるなら、確かに、かの真理の内的な光においてわれわれが観るところのもの<sup>(35)</sup>の現存を語るようになる。内なる人と言われる人は、この光によって照らされ illustrari、喜びを得る frui<sup>(35)</sup>であろう。」

すなわちここで、われわれが何かを知ることとは、真理の光によって照らされるといった徹底して受動的なものであると同時に、それを「喜ぶ」という最も積極的な意味をも担うものなのである。そしてまた、「それにしても、人間はこのように惨めな者でありながら、しかもなお、虚偽よりはむしろ真理を喜びたいと思つて<sup>(36)</sup>います」とあるように、われわれは、常に真理から或る促しを受けており、そこで求められているのは、すべての人がそれによって「喜ぶ」ことを欲するような真理なのである。

さらに、このような探究を促すものとしての真理への、われわれのかかわり方は、それを「知りたい」という希望としてであり、そしてそれは「常に同一にまします神よ、私に私を知らしめたまえ、私にあなたを知らしめたまえ<sup>(37)</sup>」という、知らしめる者への祈りとしてあらわれてこよう<sup>(38)</sup>。

ここにもまた、われわれの在り方そのものがひとつの謎となり、最も切実に問われるべきものとなつてくることがみてとられるのである。

## 結びに代えて

『ソリロクシア』における真理の探究といわゆる魂の不死の論証とは、「すべての知を（未来の予知さえも）有する者」という点を接点としてかわるものであった。だがこのことは、初期のアウグスティヌスにおいては明確であったと言いがたく、そのためわれわれは晩年の『再考録』にまで下って、いわば未完成の論証を捉え直してみることが必要であった。

ところで魂の不死に関しては、以後のアウグスティヌスにおいてあまり中心的に論じられなくなったことも事実である。

「精神は永遠の理念から分離されることはない、と述べたことについて」、もしもそのときわたしが『あなたがたの罪があなたがたと神の間を分離する *Peccata vestra separant inter vos et deum.*』と書かれていることを考慮するように聖書によって教えられていたなら、そのようなことをまったく言うべきではなかったであろう。<sup>(46)</sup>

すなわち、魂と、そこにおいて在る真理あるいは永遠の理念とを、比較的単純に結びつけて考えていた初期の著作に対して、後年はわれわれの罪による神との分離ということが考慮されるようになり、それにしたがって魂の不死ということも、探究の主題から除かれていったのである。否、むしろ、よりわれわれにとつて切実な、まさにわれわれが今、様々な事物をそれとして把握するというそのことにかかわる問題へと姿を変えたと言うべきであろうか。

このように考えると、未完成でしかも議論が錯綜しているとはいえず、『ソリロクシア』においてこれらのそれぞれに大きな問いが、やはり或るひとつのまなざしによって貫かれていっていると言つてよいのではないかと思われる。少なくともあらゆる問いは、アウグスティヌスにとつてまことにすぐれて知の問題であったはずなのである。

註

- (1) *Soliloquia*, I, ii, 7.
- (2) *ibid.*, I, xv, 27.
- (3) *ibid.*, II, iv, 5.
- (4) *ibid.*, II, v, 8.
- (5) *ibid.*, II, vi, 10.
- (6) *ibid.*, II, ix, 16.
- (7) *ibid.*, II, xv, 29.
- (8) しかし、「ここで」これは銀である」としては、それが「ほんとうは」鉛である」ということは見えてはいないのであって、われわれが何ものかに関して、それを「或るもの」として把握し、それに同意を与えるという場面において、その「偽りの」ということは奇妙な仕方であって消えてしまうことにはならないか。すなわち問題は、事物あるいは判断の真偽ということよりも、むしろ或るものを「これこれである」とする、すべての場合に存していると言えるのではないだろうか。そして、しかもなおそういつた把握について、曲がりなりにも「正しい」とか「誤りである」とか言うことができるのは何によるのか、ということもまた、問われるべきである。こういった問題は、これまでの探究が、決してそれで解決したものとして終わるべきではないことを示すものでもあろう。
- (9) *Sol.*, II, iii, 3.
- (10) ただし、アウグスティヌスにおける感覚と認識についての考察は、より詳しく吟味されるべきであって、たとえば『自由意志論』での外的感覚や内的感覚に関する論述や、言うまでもなく『告白』『三位一体論』等を検討することが必要であろう。
- (11) *Sol.*, II, iii, 3.
- (12) *ibid.*, I, xv, 29.



- (13) 『ソリロクイア』において真理の不可滅性は、要約すると以下のように論じられる。すなわち、世界全体が永続するとしても滅亡するとしても、世界が永続する、あるいは滅亡したということは真実（真なる事柄）である。したがって、たとえ世界が滅亡しようとも真理は存在する。また仮に真理そのものが滅びるとしても、真理が滅びたということは真実であるが、真理が存在しなければ真なることがらはありえない。それゆえ、真理はいかなる場合においても滅びないのである。(cf. *Sol.*, II, ii, 2.)
- (14) *Sol.*, II, xiii, 24.
- (15) しかし「disciplina est veritas」という表現は、いささか曖昧さを残すものであると言わざるをえない。すなわち、確かに個々の真なる事柄は、その学知（の真理）によって確認されるのではあるが、各々の学知のそれぞれが、ただちに真理そのものであるというわけにはいかないからである。この曖昧さは、そのままこの議論全体の構造の甘さとして、小論においても後に検証されることとなる。
- (16) *Sol.*, II, xx, 35.
- (17) *Retractiones*, I, iv, 4.
- (18) アウグスティヌスの思想が、初期のいわゆる想起説から照明説へ移行した、と一般に言われる所以である。確かにアウグスティヌスは、特に初期の著作において「想起 commemoratio」という概念を用いて説明していることが多いが、『再考録』の中には想起や忘却とらった表現を修正して、「照明 illuminatio」という表現に言い換えているということができる。しかしながら、ここで彼の思想が決定的に大きく転換したというよりも、むしろ初期の時点では曖昧なままであったものが、徐々に明確なかたちをとってきたというべきであり、アウグスティヌスは初期においても魂の先在を認めていたというわけではなからう。(cf. E. Gilson, *Introduction a l'étude de Saint Augustin*, Deuxième édition, J. Vrin, Paris, 1949, pp.103-129.)
- (19) *Sol.*, II, xix, 33.
- (20) *Ret.*, I, iv, 1.
- (21) *Sol.*, II, xix, 33.
- (22) *Ret.*, I, v, 1.
- (23) *ibid.*, I, v, 2.

- (24) 魂が個々の人々の魂であるのかどうか、ということもはっきりしてはいない。
- (25) *De magistro*, X, 32. 小論では詳説できなかったが、この『教師論』の主要部分では、特に言語に関して興味深い探究が続けられている。これは少し後の「キリスト教の教え」とも併せて、いわば記号論的な論究として注目すべきであろう。
- (26) *De mag.*, X, 33.
- (27) *ibid.*
- (28) *ibid.*, XI, 36.
- (29) *ibid.*, XI, 38.
- (30) *ibid.*, XIV, 46.
- (31) そういった意味では、われわれの認識やその伝達は、謎 *aenigma* という状況の中で成立するほかにない、とも言えよう。さらに多少先取りして言うならば、ここからことばの比喩的な解釈というものが、或る積極的な方法として意味をもつてくることになるのではないだろうか。
- (32) しておそらくは、このことが真理探究の或る確実性を支えているものでもあろう。
- (33) われわれにとって何ごとかを知ることとは、まずもってその「何であるか *quid*」(あるいは本質 *essentia*) を捉えることであるが、同時にそれが「在らしめられて在る」ということを聞きとることはないだろうか。小論では詳しく考察するに至らなかったが、真理に「照らし合わせる」とは、実はこのようなあらゆる被造物の両面性(とわれわれには映るもの)をみてとることであるとも思われる。これについては、たとえば『告白』第十卷第六章等を中心に、さらに考察を深めることが、課題として残る。
- (34) *Confessiones*, X, xxiii, 34.
- (35) *De mag.*, XII, 40.
- (36) *Conf.*, X, xxiii, 34.
- (37) *Sol.*, II, i, 1.
- (38) 『ソロクティア』の全体が、探究というよりはむしろ祈りを基調としていることの意味もここにあると思われる。

(39) *Is.*, 59, 2.

(40) *Ret.*, I, v, 2.

(本学大学院博士課程・哲学)